仏教讃歌にみる学びと創造の教育
―仏教讃歌を演奏することで学ぶ―

The Education of Learning and Creativity in Buddhist Hymns:
Learning through Performing Buddhist Hymns

ガハプカ　奈美

はじめに

仏教は多くの人々にとって、宗教的な信仰体系だけでなく、人間としての存在の本質や幸福探求の手段として捉えられている。さらに、仏教は地域や時代を超えて広まり、様々な文化や芸術形態と深い関わりを持ってきた。その中でも、仏教讃歌は独自の美しい言葉や旋律によって、仏教の教えや理念を伝える役割を果たしている。

教育の観点から見ると、仏教讃歌は知識や情報の伝達手段としてのみならず、心の形成や感性の豊かさの養成にも貢献するとされていることが、これまでの研究[i)]でも言及してきた通りである。

例えば、キリスト教などの聖歌や、様々な国々の民族音楽は、文化的な伝統を次世代に継承する役割を果たしている。同様に、仏教讃歌もその美しい詩と響きによって、人々の心に深く響くことが言えよう。聖歌や民族音楽の継承は、「演奏されること」でなされており、仏教讃歌においても「演奏すること」で心の教育が確立されるべきであると考える。また、仏教讃歌の旋律や歌詞の響きが子どもたちの感性や情操教育に大いに貢献するとも考えられる。

仏教讃歌は教えや哲学を音楽的かつリズミカルに表現する点で、言語や思考能力の発達にも良い影響を与えると思われる。リズミカルな音楽は脳の発達を促進し[ii)]、注意力や集中力を高める効果がある[iii)]とされている。加えて、讃歌には重要な教えや思想を理解する手がかりが隠されており、子どもたちの思考力を育てる上でも有効な教材であると言えるだろう。また、仏教讃歌は現代の

社会問題や倫理的な課題にも光を当てることができる。このことは、仏教の智慧や慈悲の教えは、共感や思いやりを醸成する助けとなるだけでなく、倫理的な選択や社会的な責任を果たすための指針となるであろう。讃歌を通じて、子どもたちは善行や道徳的な価値観に触れ、その意義や実践方法について考える機会を得ることができる。こうした経験は、自己と他者との関係性を理解し、社会性を育む上でも非常に重要である。合唱は他の楽器と違い、楽器という媒体を用いずに自分自身そのものが楽器となり、音楽の本質を知り、声を合わせるという行為によって、共に歌う仲間とは語らずとも、その歌詞の内容に共感し、音楽表現の工夫をぶつけ合い、その中で「歌う喜び」、「仲間と一つの表現を作り上げる喜び」そして、絶え間ない努力が必要であることに気がつく。そのような内的体験を経て、我々は自分たちの演奏を発表して誰かに聴いてほしいと思い、さらに上の演奏を目指すようになる。そのような内的体験について合唱曲を用いて指導ができるものである[iv)]。このように、仏教讃歌は教育教材として多くの意義を持っていることが明らかである。文化的な伝承や感性教育、思考力の育成、倫理的な価値観の醸成など、幅広い教育目標に適応可能であり、教育の一環として積極的に活用されるべきである。

仏教讃歌を演奏することは、単なる音楽の演奏にとどまらず、その背後にある仏教の教えや啓示を理解しようとする学びの過程でもあり、これによって、私たちは仏教の教えや思想をより深く学び、自身の成長や心の豊かさを追求することができるのである。また、仏教讃歌の演奏は、創造的な教育の手法とも言えることから、「演奏すること」は音楽表現や感情の表出を通じて、自己を表現し、新たな音楽の解釈や創造を試みることができよう。このような創造性は、学びの場や教育の現場で重要な要素であり、個々人の才能や感性を引き出すことに繋がると考えられる。

本論文では、仏教讃歌を演奏することで学びと創造の教育を追求することで、単なる理論や知識の習得だけではなく、直感や感性を通じた深い学びの体験となるであろうことを明らかにしたい。

本稿の目的は、仏教讃歌を演奏することで学びと創造の教育に焦点を当て、その意義や効果について述べた上で、詳しく探求し、教育現場における実践方法や効果的な活用の提案することにある。

1．仏教讃歌の教育教材としての応用

仏教讃歌は、その深い教義や哲学的な内容から、倫理的な指針や生き方を学ぶための有益な教材となり得ると考え、これまで「合唱１」（教育学科１回生免許必修科目）、「合唱２」（教育学科選択科目）、「声楽基礎Ⅱ」（教育学科２回生選択科目）、「音楽教育演習Ⅰ・Ⅱ」（音楽教育学専攻３回生必修科目）などの授業で歌唱教材として取り扱った。

以下にその応用方法を示す。

仏教讃歌を演奏することを通じて学ぶ教育教材の応用についての提案として以下のように５つを挙げることができる。

１）仏教讃歌の学習と解釈：学生たちは仏教讃歌の歌詞や文化的背景について学び、解釈することで仏教の教えや価値観を理解し、讃歌の調べやリズムに合わせて演奏することで、その意味をより深く体感することも可能である。

２）楽器演奏と共感の醸成：仏教讃歌は通常、オルガンでの伴奏がなされるが、ピアノ伴奏や管楽器での伴奏へ編曲をほどこし、それを演奏することを通して学ぶことで音楽的な表現力や共感力を養うことができる。演奏することで、自らが讃歌の一部となり、共感の輪を広げることができる。

３）コラボレーションと社会性の育成：仏教讃歌は多くの場合、共同で演奏されている。履修者は他の演奏者と協力し、一つの調和した演奏を目指す。これによって、コミュニケーション能力や協働性を発展させることができる。

４）創造性と表現力の発揮：仏教讃歌の演奏において、学生たちは自身の創造性や表現力を発揮する機会を得る。例えば、既存の讃歌に自分なりのアレンジを加えることや、創作した讃歌を演奏することもできよう。これによって、学生たちの独自性や創造力を引き出すことができ、自信をつけることへもつ

ながる。

5）文化の発信と伝承：仏教讃歌は、仏教の教えや文化を伝える一つの手段である。学生たちは自身が演奏することで、仏教讃歌を通じて文化を発信し、他の人々に伝える役割を果たすことができ、自分自身で学んだ讃歌を後世に伝えることで、文化の伝承にも貢献することができる。

以上５つが、仏教讃歌の教育教材としての応用として考えられる要点である。

これらの要素を教育教材として取り入れることで、履修者は仏教讃歌を通じて多面的な学びや成長を体験することができると考え、本研究に着手した。

１．１　倫理教育の手段としての活用

仏教讃歌は、その歌詞内容に、善行や慈悲、自己超越などの倫理的な価値観を詠んでおり、これを通じて学生たちに道徳的な指針を提供することが可能である。讃歌の内容を分析し、議論することで、学生たちは自己成長や他者への思いやりを促進することができるであろう。

倫理教育の手段としての仏教讃歌の活用 倫理的な価値観や道徳的な心を育むことは、教育の重要な役割の一つである。この点において、仏教讃歌は深い教訓や心の成長を促すメッセージを伝えることから、倫理教育の手段として優れた活用が考えられる。

まず、仏教讃歌の歌詞には共感や思いやり、自己超越などの倫理的な価値観が詠まれている。これらの要素は、学生たちに他者への配慮や社会への貢献の重要性を理解させるための基盤として機能すると考える。仏教讃歌を通じて、善意や共同体意識の育成を図る教育的アプローチが可能となる。さらに、仏教讃歌は人間の苦しみや欲望に対する洞察を提供し、物質的な追求だけでなく、内面的な充足や真の幸福の探求の重要性を学生たちに示すことができる。倫理的な選択や自制心の養成に貢献する要素が含まれており、教育現場で仏教讃歌を使用する際には、その背後にある教えや価値観を分かりやすく説明し、学生たちと共に探求する機会を提供することが重要である。また、比喩や象徴を含

む讃歌を解釈するプロセスは、倫理的な問題を探求し、多面的な視点を持つ能力を養う手段としても有益である。

総じて言えることは、仏教讃歌はその深い哲学的な内容と感情的な表現を通じて、学生たちに倫理的な洞察と心の成長の機会を提供することができるということであり、仏教讃歌の学修によって、学生たちは自己と他者を尊重し、誠実な人間としての道を見つける手助けを受け得ることとなる。

１．２　文学的鑑賞としての活用

仏教讃歌は仏教の教えや価値観を端的に表現したものであり、その内容は共感や感動を呼び起こすものが多い。この点から、仏教讃歌は教育教材としてもっと効果的に活用することができると考えた。また、本学では重要な行事だけでなく、月例礼拝などで学生たちが仏教讃歌に触れる機会が多いことから、様々な切り口から仏教の精神に触れることで、より一層その教材としての効果が高まると考えた。

以下では、仏教讃歌を文学的鑑賞の対象として活用することによって生じる意義について考察してみたい。

第一に、仏教讃歌を文学的な鑑賞対象とすることによって、文学の理解力や鑑賞力の向上が期待できる。仏教讃歌は独特のリズムや韻律を持ち、美しい響きを生み出す言葉遣いが特徴である。これらの要素を鑑賞し、言葉の奥深さや表現力に対する洞察力を養うことで、学生たちはより豊かな感性を育むことができる。第二に、仏教讃歌を文学的な鑑賞の対象として活用することによって、宗教に対する理解や寛容さを醸成することができる。仏教讃歌は仏教の教えや観念を表現したものであるが、それは一般的な宗教の教えと異なる特徴を持っている。このため、仏教讃歌を通して仏教の思想や倫理に触れることで、生徒たちは異なる宗教観に対する理解を深め、相互尊重の意識を醸成することができるであろう。第三に、仏教讃歌を文学的な鑑賞として活用することによって、精神性や心の成長を促すことができる。仏教讃歌は生老病死や苦悩といった人

間の普遍的なテーマを描いており、これらのテーマに対する叡智や教えが込められている。

学生たちは、自身の心の状態と仏教讃歌のテーマとを対比し、自己の心の成長や向上について考えることができるであろう。また、仏教讃歌の教えに共感し、それを実践することによって、学生たちは倫理的な指針を身につけることもできるであろう。

以上のように、仏教讃歌を文学的鑑賞の対象として活用することには、文学の理解力や鑑賞力の向上、宗教に対する理解や寛容さの醸成、精神性や心の成長の促進といった意義が存在する。教育の場において、仏教讃歌を教材として積極的に活用することで、生徒たちの成長や教養の向上に大きく寄与することができるであろう。

1．3　複数の文化や宗教、音楽文化の理解促進

仏教讃歌は、東洋の宗教的・哲学的伝統を代表するものの一つである。これを通じて、学生たちは異なる宗教や文化について理解を深め、多様性を尊重する意識を養うことができる。複数の文化や宗教、音楽文化の理解を促進するにあたり、仏教讃歌は、その深い教訓と美しい詩的な表現を通じて、複数の文化や宗教、音楽文化に対する理解を促進するための豊かな教材となり得る。

ここでは、仏教讃歌が異なる文化や宗教、音楽の背景を通じて学ぶことでもたらす意義について考察する。まず、仏教讃歌は様々な時代や地域で創作され、異なる文化や創作された時代によっては、宗教の影響を受けてきている。これによって、学生たちは異なる文化的背景や価値観を理解し、共感する力を養うことができると考える。讃歌を通じて、他者との共通点や違いを尊重し、多様性を受け入れる姿勢を培うことができるであろうし、仏教讃歌は宗教的なテーマを含むことが多いため、宗教間の共通点や違いを学ぶ窓口としての役割も果たすことができる。学生たちは異なる宗教の信仰や価値観に触れることで、宗教的な対話と相互理解を深める機会を得ることができ、宗教間の対話と共存の

重要性を学ぶことが可能となる。音楽文化としての仏教讃歌は、異なる楽器や歌唱スタイルを通じて音楽の多様性を示す要素を持っている。学生たちは、音楽の表現力や感情移入の仕方を通じて、異なる音楽文化の魅力を体験することができる。また、音楽が持つ感情的な共感の力を通じて、異なる文化や背景に関わらず、共通の人間性を感じることもできる。教育現場での仏教讃歌の活用に際しては、歴史的背景や文化的な文脈を説明し、学生たちが深く理解するためのガイドを提供することが重要である。また、グループディスカッションやプロジェクトを通じて、異なる文化や宗教の研究を深める機会を設けることで、学生たちは積極的な学びを進めることもできる。

一方、仏教自体に目を向けてみても、仏教は世界中に広がり、多様な典籍や教義を持っている。やはり、このような多様性を理解するためには、仏教讃歌を通じてその歴史や背景を学ぶことは非常に有益である。例えば、インドの古代音楽や中国の雅楽など、仏教讃歌には地域ごとの独自の音楽文化が反映されており、それぞれの文化を知る手助けとなるだろうし、仏教讃歌の歌詞やメロディは仏教の教えや信仰、精神を表現しており、それぞれの文化や宗教における独特な視点を理解するための手がかりともなる。さらにいうならば、仏教讃歌は音楽文化の理解を促進する効果も有しているであろう。音楽は、文化や宗教の一部として表現されるため、音楽を通じてその背景や特徴を理解することは重要である。仏教讃歌は、メロディやリズム、楽器の使用など、音楽文化の要素を具体的に示している。これにより、学生は異なる音楽文化の比較や分析を行い、音楽の役割や意義を理解することができたり、仏教讃歌は日本の伝統音楽とも関連があり、和楽器や雅楽の基礎を学ぶための素材としても活用できたりもする。

最後に、現代のグローバルな社会で自分を見失いがちであったり、生きる意義に疑問が生じたりしやすく、自然な形で哲学を学ぶに重要なものであると確信している。仏教讃歌を通じて、異なる信念や習慣に対する開放的な感覚を培い、共通の価値観や人間性を尊重する意識を醸成することができるであろう。

このように考えると、仏教讃歌は単なる宗教的な教材にとどまらず、複数の文化や宗教、音楽文化の理解促進のための重要な教育教材となることがわかる。教育の場で、仏教讃歌を積極的に利用し、学生たちが世界の多様性を理解し、共存する力を育むことができるような教育環境を整えることが求められている。

2．教育教材としての効果

ここからは、仏教讃歌を教育教材として応用することによって、どのような教材としての効果が期待されるかを考えていきたい。

2．1　言語的な能力の向上

仏教讃歌の詩的な表現や複雑なメッセージを解読する過程で、学生たちは言語的な能力を養うことができる。言語的能力向上としての仏教讃歌の意義仏教讃歌は、その美しい詩的な表現や深い教訓を通じて、言語的な能力向上に大きな影響を与える教材として活用できる。以下に、仏教讃歌が言語的能力向上に与える意義について考察したい。

1）語彙力の拡充：仏教讃歌は独特の言葉遣いや比喩、象徴を含んでいる[v)]。これに触れることで、学生たちは新たな語彙を学び、日常のコミュニケーションや表現に活用する能力を高めることができる。

2）表現力の向上：詩的な表現や感情的なメッセージを理解し解釈することは、自身の考えや感情を適切に表現する能力を養うのに役立つ。学生たちは讃歌を通じて、自己の意見や感受性を適切な言葉で表現する方法を学ぶことができるであろう。

3）読解力の育成：仏教讃歌は深いテーマを含むことが多く、その意味やメッセージを理解するためには繊細な読解が必要である[vi)]。学生たちは文章の要点を把握し、論理的な関連性を読み取るスキルを高めることができると考える。

4）文学的要素の理解：前述ように、仏教讃歌の歌詞からは、詩的な表現や比

喩、象徴の解釈は、文章の深層を理解する上で重要である。これを通じて学生たちは文学的要素の使い方や効果を理解し、文章をより深く鑑賞する能力を培うことができる。

5）語感とリズムの感覚：仏教讃歌の詩的な言葉選びやリズムは、語感やリズムの感覚を磨く手助けとなる。学生たちは言葉の響きやリズムに注意を払いながら読むことで、言語の音韻やリズムに対する敏感さを高めることができるであろう[vii]。

教育現場では、仏教讃歌の文章や詩句を読解し、解釈するプロセスを通じて、学生たちに言語的な能力向上の機会を提供することが重要である。また、ディスカッションやクリエイティブなプロジェクトを通じて、言語的なスキルを実践的に発展させる機会を設けることで、学生たちは自己表現の幅を広げることができるであろう。

総括すると、仏教讃歌はその詩的な表現と深い教訓を通じて、学生たちの語彙力、表現力、読解力、文学的理解、語感とリズムの感覚など、多くの言語的能力を向上させる有益な教材となり得ると考察できる。

2．2　文化的な理解と共感の醸成

仏教讃歌は、仏教信仰や教えの一環として歌われる歌詞であり、これらの讃歌は、仏教の思想や教えを理解する上で貴重な情報源でもある。仏教文化の一部として大切な役割を果たしていると考える。そのため、仏教讃歌を教育教材として利用することには、文化的な理解と共感を醸成する重要な意義がある。異なる文化や宗教の視点を理解し、共感する力が養われることで、学生たちは包括的な視野を持つことができるであろう。文化的な理解と共感の醸成としての仏教讃歌の意義は、異なる文化や背景における価値観や感情を詩的に表現したものであり、その意味やメッセージを通じて文化的な理解と共感の醸成を促進する重要な教材として活用できる。以下に、仏教讃歌が文化的な理解と共感の醸成に与える意義について考察したい。

1）文化の多様性への理解：仏教讃歌は、既に述べてきたように、異なる時代や地域で生まれたものであり、その背後には様々な文化的要素が含まれている。学生たちは讃歌を通じて、異なる文化の特徴や背景を理解し、尊重する力を養うことができる。これによって、文化の多様性を受け入れる姿勢が醸成されることであろう。

2）感情移入と共感の育成：仏教讃歌には人間の喜びや悲しみ、苦悩、希望などの感情が詠まれている。これに触れることで、学生たちは異なる背景や文化における感情を理解し、感情移入と共感のスキルを高めることができると考える。共感力の育成は、他者への理解を深める基盤となるものである。

3）価値観や倫理の比較と対話：仏教讃歌が持つ価値観や倫理的なメッセージは、異なる文化や宗教のものと比較することで、共通点や違いを探求する機会を提供することができる。学生たちは異なる価値観に対する理解を深め、対話を通じて新たな視点を得ることができる。

4）歴史や伝統の尊重：仏教讃歌は歴史や伝統に根ざしたものであり、その背後には長い歴史と深い意味がある。学生たちは讃歌を通じて歴史や伝統を尊重し、過去からの教訓や知恵を学ぶことができる。

教育現場での仏教讃歌の活用に際しては、背景情報や文化的な文脈を提供し、学生たちが讃歌の意味やメッセージを理解する手助けを行うことが重要である。また、ディスカッションやプロジェクトを通じて、異なる文化について探求し、他者との共感を深める機会を設けることで、学生たちは文化的な理解と共感の醸成を進めることができるであろう。

仏教讃歌は仏教の教えや概念を簡潔かつ美しい形で表現しており、これらの歌詞を通じて、仏教の基本的な考え方や人生哲学を学ぶことできる。具体的に言葉を用いて述べるならば、「一切皆苦」という言葉は、生きることの苦しさや無常さを表現しているが、それを単に「仏教用語」と受け取らず、現代にしっかりと照らし合わせて、その意味を理解し、それを演奏に活かしていくことができる。現代での意味とは、通勤ラッシュや仕事でのプレッシャー、社会的な

期待に追われる生活の中で感じているストレスや疲れを指す[viii]と言われ、「難しい言葉だ」というイメージさえある仏教の言葉であるが、その時代に合わせた解釈をすることで、様々な示唆を得ることが可能となる。その歌詞を正しく解釈し理解することで、生活や社会における苦悩に対する対処法や解決策を見出すことができるのではないだろうか。また、仏教讃歌は言葉を通じて感情や精神状態をも表現するため、共感を呼び起こす力もあると感じている。これらの歌詞には悲しみや喜び、希望や慈悲などの感情が込められているからこそ、読み手や聴き手の心に響くのである。

以上のように、仏教讃歌の教育教材としての意義が大いにあることがわかる。仏教の教えや思想を理解し、共感することで文化的な理解や相互関係を促進することができ、同時に仏教に関係のない歌詞の読み取りや詩の理解力、共感力も育むことが可能である。

佛教讃歌を通じて、学生たちは自己成長や社会貢献に向けた価値観や心の持ち方を学び、より豊かな人間性を養うことができるのである。

3．仏教讃歌を活用した演奏実施と考察

3．1　仏教讃歌を活用した教育の事例

築地本願寺での例：ランチタイムコンサートの開催

本コンサートは、2006年１月に第１回が開催されており、それまで2018年10月には第150回コンサートの開催がなされたが、2020年10月には新型コロナウイルス感染症対策の上で開催中止をせざるを得なかった。しかし、2021年４月にはWEB配信による「ナイトタイムコンサート」として実に半年ぶりに再開されている。その後、2022年12月には、第200回ランチタイムコンサートを迎えた。今日に至るまで様々な工夫をしながら、何とか音楽を通じて仏教を絶やさず伝えていこうという想いの強さがあると感じている。

コンサートの内容は、まず、本堂で、「仏さまのお話」が10分ほど行われ、その後に演奏が始まる。このことによって、仏教にはじめて触れる人であって

も、非常に居心地よく、わかりやすくなる、と同時に仏教讃歌や仏教の音楽を知ってもらう良い機会を得るであろう。

また、プログラムも１か月に１度、月末の金曜日に開催され、オルガン演奏、オルガンと声楽、オルガンとサックスなどと多彩である。

演奏内容に関して言うならば、その楽器に重要となる楽曲から奏され、仏教音楽だけを演奏するにとどまらず、楽器そのものの歴史も感じられるようにプログラムが組まれていることが分かる。

ここで記憶にも新しい、2023年８月25日（金）のプログラムを例にその進行を考えてみたい。（以下太字筆者加筆）

１．グラン・ディアローグ
　　作曲：ルイ マルシャン（1669-1732）

２．弘誓の船
　　作曲：平田聖子

３．み仏はほほえみて
　　作曲：長谷川良夫

４．パスティッチョ
　　作曲：ジャン ラングレー（1907-1991）

５．星に願いを
　　作曲：リーハーライン（1907-1969）

６．鐘
　　作曲：レオン ボエルマン（1862-1897）

仏教讃歌に関しては、８月25日（金）に行われたパイプオルガンコンサートで、太字にした〈弘誓の船〉と〈み仏はほほえみて〉が奏されたが、オルガンの音色を聞き、観客は、心の中で（あるいは小さな声で）歌詞を唱えることができるように工夫がなされていることを感じた。また本プログラムは、後日YouTubeでも視聴可能となっているが、この際、仏教讃歌には、その讃歌の

歌詞が画面に示され、視聴者はそれを見て、オルガン演奏を聴きながら、会場に居るのと同じようにあるいは、その仏教讃歌を知らずとも、その歌詞を見て、感じることができるような工夫がなされていた。このように、築地本願寺で得た知見を活かし、本学学生による演奏実施に向けプログラム選曲を試みた。

３．２　学生による演奏会の実施

これまで取り入れた授業を受講してきた学生らによる、外部向けの仏教讃歌を中心とした研究演奏発表会を実施した。

本研究演奏発表会を実施するにあたり、参加学生らと全８回の練習を行った。

初回練習より約１か月前に、全ての演奏楽譜を配布し、各自音取りなどは済ませてもらった。顔合わせ初日には、本演奏会のコンセプトや、プログラム選曲の理由、そして各楽曲に対する楽曲解説を行った。この際、築地本願寺で行われているランチタイムコンサートについて、内容も伝えた。参加学生らからは、「音楽としては知っていたけれども、そんな意味があるなんて思わなかった」「きれいな音楽だな、と思っていたけど、歌詞の意味とか楽曲が出来た背景を聴くと、『きれい』な意味が変わった」など、多くの発見があり、本演奏会の意義を感じた。

まずプログラムは以下である。

（１）〈きよけきひかり〉

　　親鸞聖人御和讃　作曲　日高　脩

（２）〈聖　夜〉

　　作詞　九条武子　作曲　中山晋平

（３）〈生きる〉

　　作詞　中川静村　作曲　森　正隆

（４）〈ありがとう〉

　　作詞　高田敏子　作曲　中田喜直

（５）外国の宗教音楽　讃美歌（管楽器演奏）　　管楽器編曲：天野　萌音

第30番・第98番　作曲　メンデルスゾーン

第109番　　作曲　グルーバー

第130番　　作曲　ヘンデル

（6）〈弥陀大悲の誓願を〉

親鸞聖人御和讃　作曲　井上一朗

（7）女声合唱曲≪花は嘆かず≫

詩　坂村真民（仏教詩人）　作曲　徳永洋明

1．すべては光る

2．花は嘆かず

3．風人

4．もう人間はひとりぼっちではない

（8）〈衆　会〉（管楽器伴奏）

作詞　羽田野 仁　作曲　平井康三郎　　管楽器編曲：天野　萌音

演奏会に際して配布したパンフレットに記載した「曲目解説」は以下。（原文ままま転載）

1．〈きよけきひかり〉の歌詞は、親鸞聖人の和讃の中から作曲されたもので、歌詞は次のように、七五調の四句一章の形式をとってあります。

清けき光　（親鸞聖人御和讃）

清浄光明ならびなし

遇斯光のゆゑなれば

一切の業繫ものぞこりぬ

畢竟依を帰命せよ

この和讃に出てくる「光」には、我々が今思う太陽や電球の明るい光で勢いがあるものの意味と捉えるのではなく、仏の十二の光＝仏智の光の意味と考えられます。

和讃は和語の『教行信証』とも言われ、親鸞が漢文体で書かれたものを一般の者にも読んで理解することが出来るように書かれたもので、『浄土和讃』、『高僧和讃』、『正像末和讃』と３つあり、これらをまとめて「三帖和讃」と呼ばれています。『浄土和讃』は118首あり、「大経」をはじめとした経典などによって、阿弥陀如来とその浄土の徳を讃嘆したものです。『高僧和讃』は119首あり、インド、中国、日本にわたる七高僧の教えとその軌跡を讃嘆したものです。『正像末和讃』は116首あり、釈迦がなくなられて末法の世を生きるものにとって阿弥陀如来のすくいの他道はないという親鸞の深い悲しみと喜びが込められたものです。

２．〈聖夜〉は本学の創立者の一人であり、詩人でも知られる九条武子の詩です。「聖夜」の詩は、1927年（昭和２年）に出版された随筆『無憂華』の中に収められています。七五調の詩の中には、夜空に輝く美しい「あまた（の星のように）おわするほとけたち」に守られて生きていることへの歓喜や安らぎがあらわされています。

３．〈生きる〉の作詞者、中川静村は晩年、癌を患いながらもベッドの上で、「生きる」を含む詩をたくさん集めて、詩集『その風のなかの念佛』を纏めました。「生きる」ということは「生かされて」いるということだと、この詩は教えてくれます。煩悩を抱えたこの身「このまま」でお念仏によって自身が変わり、救われていくのだということがひしひしと伝わってきます。１番から３番の歌詞を通して、あなたが「生きる」ことそのものが「生かされて」いるということですよ、という温かいメッセージがこめられています。

４．〈ありがとう〉それは実は一番身近な仏教用語なのです。「有る事が稀である」「滅多にない事」という言葉から、「有難し」「有難い」と言われて、仏教に由来する言葉とされています。心のそこから「ありがとう」と言えることで、

一人で生きているわけではないのだ、たくさんの人々や自然の恵みのおかげで、こうして私たちは「生きている…生かされている」今こうして私たちが生きているのは、当たり前ではなく、「有難い」ことだったと、この詩から感じることができるでしょう。

５．外国の宗教音楽（讃美歌：第30番、第98番、第109番、第130番）

今回は、キリスト教の讃美歌（ドイツ讃美歌）から、クラシックの作曲家が作曲したものの中で、日本では教会以外で使用されているような楽曲を取り上げました。まず、第30番と第98番を作曲したのはメンデルスゾーンです。讃美歌の第30番はピアノ曲の無言歌集作品30－３が原曲になっています。歌詞には、聖書の詩編や創世記、ヨハネの黙示録などから作られています。次に讃美歌第98番は、ルカ、イザヤ書、ガラテヤ人への手紙などから歌詞が作られています。クリスマスの時期に様々なアレンジはなされて、繁華街など、いろいろな場所で耳にします。

第109番はきっと皆さん耳にしたことがあったでしょう。〈きよしこの夜〉ですね。この楽曲の誕生から今年で205年の月日が流れました。この歌は、1818年12月24日の寒い夜、オーストリアの小村オーベルンドルフ（Oberndorf）の礼拝堂で初めて演奏されました。この村の副司祭ヨゼフ・モール（Joseph Mohr）が、ナポレオン戦争後の貧困に苦しんでいた村の住民を慰めたいと考え、友人で教師をしていたフランツ・クサーヴァー・グルーバー（Franz Xaver Gruber）に頼んで、自分が以前書いた６行詩に曲を付けてもらい、それをクリスマスイブのミサでギターのみの伴奏で演奏したと言います。その後様々な個所で演奏されるようになり、「きよしこの夜」は、チロルの大衆歌となり、やがて世界中で歌われるようになりました。そして時が経つにつれ、歌の起源はほとんど忘れられ、モールも自分が作った歌が大流行していることを知らずに1848年に死去しています。その後1854年、この曲の作曲者が、オーストリアの作曲家フランツ・ヨーゼフ・ハイドン（Franz Joseph Haydn）の弟で同じ

く作曲家のヨハン・ミヒャエル・ハイドン（Johann Michael Haydn）だということに落ち着きかけたところで、ようやくグルーバーが自分の曲だと気が付いて今に至ります。

第130番は日本中で「表彰式」などが行われるときに奏される楽曲となっており、非常に有名な楽曲です。この楽曲は、ヘンデルが作曲しました。もともとは、オラトリオ≪ユダス・マカベウス≫の１曲〈見よ、勇者は帰る〉という楽曲を讃美歌用に編曲して歌われるようになりました。

このように、日本では「宗教を背景に持っている」楽曲とは知らずに親しんできた音楽がたくさんあります。今日を機に皆さんもその音楽の持つ背景に思いを馳せてみるのも良いかもしれません。

６．〈弥陀大悲の誓願を〉は、浄土真宗の教えそのものに出会える楽曲です。2014年の本願寺新報に、浄土真宗では、座禅などの出家者の行（ぎょう）は勧（すす）めません。ただ、お念仏を日常生活の中で、称（とな）えなさいと勧めます。

弥陀大悲（みだだいひ）の誓願（せいがん）を
ふかく信ぜんひとはみな
ねてもさめてもへだてなく南無阿弥陀仏をとなふべし
（註釈版聖典609ページ）

阿弥陀仏の教えに出遇（であ）い、その本願の勧めるお念仏を生活習慣として称えていくならば、そこに新しく浄土真宗らしい人格が育てられていきます。苦しいときにも、いつもアミダさまが一緒にいてくださる。今日のいのち、この巡り合わせをかけがえのない尊いことだったと受けとめられるような人格主体が生まれていきます。それを「お育てにあう」と私は受けとめています。これこそ、事実をありのままに受けとめられるような人格が育てられることだと

思います。

「三度の飯がおいしいときに仏法は聞くものだ」と聞いたことがあります。お念仏を称え、親鸞聖人のまことの浄土真宗を通して、阿弥陀仏の教え、お釈迦さまの教えを大切に生きていきたいと思うことです。（本願寺新報　2014年04月01日号掲載）とあります。

本日は、美しい女声合唱で、その「大切に生きていきたい」思いを胸に奏でます。

７．女声合唱≪花は嘆かず≫は仏教詩人である坂村真民の詩で作曲された曲です。坂村真民は、1909年（明治42年）熊本県玉名郡府本村（現在の荒尾市）生まれで、教員をしながら、短歌、詩を書き続け、『詩国』を発行し、仏教伝道文化賞などを受賞しています。一遍上人を敬愛し、地球に祈りを捧げ、人生の心理、宇宙の真理を紡ぐ言葉は、弱者に寄り添い、癒しと勇気を与えるものです。（坂村真民 記念館プロフィールより抜粋）

咲くも無心
散るも無心
花は嘆かず
今を生きる
「今を生きる」 坂村真民

あなたにとって「今」を生きるとは、どういうことですか？過去の失敗や成功、未来への見えない不安や希望…どのような「理想」を「幸せの形」として実現しようとしていますか？それは本当に「正しい道」ですか？今、あなたの目に美しい空が見えますか？大切な人の本当の姿が見えていますか？あなた自身の本当の心が見えていますか？と多くをそれぞれの魂に問いかけているようです。

８．〈衆会〉は〔しゅうえ〕と読みます。京都女子大学の学業の始業・終業時のチャイムに使用されています。本楽曲は、1935年（昭和10年）仏教音楽協会より「仏教賛歌」として発表されました。その後1959年には、『混声合唱曲集』（音楽之友社、1959年）のために本楽曲も手直しして、収録されています。

衆会とは、多くの人々が仏さまの前に集い、ともに礼拝することを意味していて、一人ひとりの生い立ちや、仕事は違っていても同信の人々がともに集うこと自体が大きな喜びであること。仏さまの御光の中でみ教えを聞くことの尊さ、楽しさを１番であらわしてあります。２番では、最終行に「法（のり）をきく たのしきつどい」とあるように、私たちが仏の教え（仏法）に出逢えた深い喜びを歌っている楽曲です。歌詞の内容をみても、京都女子大学に集う私たち皆の様子にふさわしい内容になっていると感じています。

［ここまで、曲目解説］

本演奏会には、学内関係者、附属小学校児童、京都女子中学校生徒、そして、一般の方々がいらして下さった。一般の方々の中には、普段、クラシック音楽が好きで聴いたりしているが、「仏教」あるいは「仏教讃歌」を初めて知った、という方々もいらしていた。特に、その方々が、「仏教讃歌」の言葉や旋律の美しさに心打たれ、会場では涙を浮かべて聴いていた方もいたことは特記すべきことである。

３．３　研究結果と考察

今回の研究における演奏会の試みを振り返る事でその研究の結果を考察したい。

まず、研究演奏会の出演者は、音楽教育学専攻の３回生から有志でなされた。応募の際に練習日程を指定し、参加日程に下限を作ったが、13名もの学生が名乗り出てくれた。

その中でも、歌唱だけをする学生、歌唱と楽器を吹く学生、ピアノ伴奏をする学生とそれぞれにちょうどその演奏会を執行できる人数が集まった。このことは、京都女子大学に通っているのだから、「もっと仏教讃歌の事を知りたい」という気持ちや、コロナ禍で何年も失ってきた、「対面での演奏会に参加したい」といった、想いがそれぞれにあったと思われる。奇しくも3回生は、京都女子大学に入学した年がちょうどコロナ禍1年目であったため、入学式も行われず、音楽の授業もすべてZoomなどの双方向型での授業や実技においては、動画でのやり取りが続いていた学年であるため、その想いは相当なものがあったと推測される。

実践の結果を明確にするため参加した学生たちに、今回のプログラムにある楽曲に関して、事前の聴き取り調査を行った。参加した学生たちは、演奏する仏教讃歌を知らなかったが、同じように、学生たちのほとんどが、讃美歌も知らなかった。クラシック音楽はその根本に「キリスト教」から派生した音楽、あるいは「教会」から発展した音楽であるため、クラシック音楽を学ぶ学生らが、本演奏会で取り扱った「讃美歌」を知らず、知らず知らずのうちに、「イベントの音楽」との認識になっているという事は筆者にとって非常に興味深いものであった。

また、仏教讃歌に関しては、過去4年間、コロナ禍であったため、重要な学内行事や仏教学での月例礼拝などの実施が出来ておらず、仏教讃歌自体に親しんでいない学生ばかりであった。そのような中で開始した練習であったため、まずは、全員で歌詞をしっかりと声に出して読むことを行った。そうすることで音や音程・和音に頼らず、その歌そのものを知ることができる。また、そこでは、学生たちにアクセントやイントネーションがわかりにくい歌詞は無いか考え、感じながら歌詞を読んでもらい、わかりにくい箇所についてどのような意味があるのか「詩」そのものを見て、もう一度「詩」全体を読みどのような意味があるのかを一緒に考えた。このことは、歌詞に音程を付けて歌う段階になった時に非常に重要な練習になる。このように、まず、参加学生には事前に

歌唱する際の基礎技術や、仏教讃歌や讃美歌に関する基礎知識の習得を目指し、歌詞を読んでイメージを話し合う時間を取り、意見交換を行った。その後は個人の参加学生に解釈の自由を与えながら演奏者全員で共有し解釈を発表し、その解釈を活かして歌唱して、どのように歌唱で表現すれば伝わるか、解釈がどのように歌唱に活きているのかを話し合いながら進めた。このことにより、以下のようなことが分かった。

1）集中力の向上：仏教讃歌の演奏は、繊細な音響の取り扱いや言葉としての美しさの表現、合奏の瞬時のコミュニケーションを要求するため、学生たちの集中力を向上させる効果があった。

2）協調性の醸成：演奏の過程での協力や調和により、学生たちの協調性が醸成され、他者との連携が円滑になった。

3）創造性の発揮：演奏における自由度の高さが、学生たちに創造性を発揮させることを促し、新たなアレンジや表現方法の模索が指導者なしにも行われるようになった。

4）歴史や文化の理解：仏教讃歌の演奏を通じて、学生たちは仏教の歴史や文化に触れる機会を得ることで、理解が深まった。

上記の研究結果から、仏教讃歌の演奏は学びと創造の教育において多くの効果をもたらすことが示唆された。これは、音楽的な要素による集中力や協調性の向上、自己表現や創造性の発揮、また文化や歴史への理解の促進といった点で特に顕著であると考えられる。 加えて、本研究では大学生を対象としたが、この効果は他の年齢層や教育段階においても有効である可能性がある。例えば、子どもや高齢者の教育（生涯教育）においても、仏教讃歌の演奏は知的・感情的・精神的な成長を促すことができるであろう。

また、本研究では演奏のプロセスにおいて個々の奏者に自由度を与えたことが効果的であったことが示唆された。自己創造的な参加を奨励することによって、個人の個性や表現力を引き出すことができ、より効果的な学びと創造の教育が可能となるであろう。

しかしながら、本研究における調査対象は限定的であり、調査期間も短期間であったため、より多様な参加者や長期的な実験および検証を行うことによって、結果の一般性や持続性についてのさらなる研究が必要とされる。また、他の音楽形式や教材との比較研究も有益であり、さらなる研究の展開が望まれる。

4．仏教讃歌の教材としての教育への展望と課題

教材としての仏教讃歌の有効性として以下のように大きく4点挙げることができる。

1）仏教讃歌は、仏教の教えや歴史、信仰体系を反映している。仏教讃歌を通じて、学生は仏教の文化的背景をより深く理解することができる。

2）仏教讃歌は、リズムやメロディ、歌詞の表現に特徴的な要素を持っているため、学生はこれらの要素を演奏することで、音楽的なスキルを発展させることができる。

3）仏教讃歌は、仏教の教えや倫理に関連するテーマを含んでいる。この教材を通じて、学生は宗教、倫理、歴史、文学などのさまざまな分野を統合的に学びの促進をすることができる。

4）仏教讃歌には、人々が直面する悩みや苦しみに対する教えも含まれている。学生はこれを通じて社会的問題や自己啓発について考える機会が得られる。

などのことが明らかになった。

一方課題としても大きく4つ挙げられる。

1）宗教的な中立性の確保：仏教讃歌は宗教的な要素を含んでいるが、学校教育では宗教の中立性が求められる場面も多い、そのため、仏教讃歌を学ぶ際に、宗教と文化の関係を適切に理解する必要がある。

2）認知的な負荷のバランス：仏教讃歌は、学生にとって新しい概念や価値観を導入することになるため、指導者は、学習内容が学生の認知的な負荷を超えないようにするための適切なアプローチや指導方法を選択する必要がある。

3）多元的な教育の促進：仏教讃歌は特定の文化や信仰に関連しているが、教

育では多元的な視点を重視する必要がある。指導者は他の宗教や文化とのつながりを探求することによって、学生により広い視野を提供することが求められる。

4）学生の興味の引き込み：仏教讃歌は学生にとって新鮮な体験となる可能性があるが、その魅力を引き出すためには工夫が必要である。指導者は学生の好奇心や関心を引き出し、彼らの学びの体験をより豊かにする方法を模索する必要がある。

以上の観点から、教材としての仏教讃歌の有効性と教育への展望、そして課題を考えてきた。仏教讃歌を教育に取り入れることで、学生の多面的な成長と心の教育に寄与することが期待される。仏教讃歌を教育の場で教材として活用することは、学生の心の支えになり得ると考えられ、学生たちの心の健康を促進し、ストレスの軽減や学習意欲の向上に寄与するだけでなく、共感や自己肯定感の育成にも寄与することが示唆された。しかし、一方では「教育」という現場ならではの課題も存在し、指針の策定や他の宗教や文化との統合についての研究が必要とされることが明確になった。

今後も継続的な研究と実践によって、仏教讃歌を教材として活用した教育の効果と有効性がさらに明らかにしていくつもりである。

註）

ⅰ）「仏教讃歌の合唱指導について～視覚・聴覚を通して～」ガハプカ奈美 京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』第35号　1－26　2022、「宗教歌に見られる言語表現について～『歎異抄』と『聖書』の言葉に着目して～」ガハプカ奈美　京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』第34号　1－22　2021　など仏教に関わる音楽や讃歌についての研究論文に詳しい。

ⅱ）「音楽と感情に関する研究の展開―心理反応、末梢神経系活動、音楽および音響特徴―」森数馬・岩永誠 心理学評論 Vol. 57, No. 2　215－234　2014　では、感情の認知ではなく感情経験を取り扱っており、音楽に対して抱かれた「印象」ではなく、まさに聴取者に喚起される「感情」に焦点を置いて述べられている。

ⅲ）「音楽聴取時における歌詞の有無と共感性が感情変化に及ぼす影響」小河妙子・篠田侑大　東海学院大学紀要10　31－38　2016　歌詞の有無により、人はどのように音楽に対して共感性を抱き聴取しているのか、何に親和性を抱くかの実験結果が示されている。

ⅳ）「歌唱における発声指導について―合唱指導のあり方―」ガハプカ奈美　京都女子大学発達教育学部紀要第17号　121－129　2021 に詳しい。

ⅴ）「仏教語彙受容史研究序説」角岡賢一　龍谷紀要第28巻第１号　77－94　2006　本論文巻末附表：仏教語彙データベース（伝来時代から現代まで）参照。

ⅵ）「児童生徒の読解力は低下しているのか―標準読書力診断検査の結果分析を通して―」田中耕司　全国大学日本語日本文学教育学会　19－26　2008　参照。

ⅶ）「仏教讃歌と讃美歌の比較と演奏～歌詞を中心に～」ガハプカ奈美・土居知子・竹内公一　京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要第28号　17－42　2015　に詳しい。

ⅷ）浄土真宗 慈徳山 得藏寺　仏教の言葉「一切皆苦（いっさいかいく）」とは？～現代の言葉でわかりやすく解説～　に詳しい。
https://tokuzoji.or.jp/issaikaiku/　　（2023年９月９日最終閲覧）

参考文献

・荒井俊一「仏教における倫理の構造」 印度學佛教學研究第48巻第２号　169-175　平成12年３月

・ガハプカ奈美「仏教讃歌と讃美歌の演奏における詩の解釈について～音楽と言語の歴史を中心に～」京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』第30号　13－30　2017

・高田信良 「仏教と倫理―〈宗教的実践〉についての一考察―」宗教研究83巻２号 503-524　2009

・田中久文　第29回 第４章 国際社会に生きる日本人としての自覚 日本人の宗教観と倫理観　NHK 高校講座ラジオ学習メモ　58－59
https://www.nhk.or.jp/kokokoza/r２_rinri/assets/memo/memo_0000001159.pdf?lib=on
（2023年９月９日最終閲覧）

受付日　令和５（2023）年９月13日　　採用日　令和６（2024）年２月７日

<キーワード>

仏教讃歌　歌唱教材　宗教曲　声楽教育